

<書評>

徐智瑛著、姜信子・高橋梓訳

『京城のモダンガール』

——消費・労働・女性から見た植民地近代』

(みすず書房 2016年 400頁 ISBN: 978-4-622-07980-4 4600円+税)

尹 智 焯



近代都市の中心には、都市の商品・イメージを消費する主体であると同時に、欲望の対象として自身自身が商品・イメージ化された女性たちがいた。本書は都市空間と女性をキーワードに、都市空間に内在するモダンティが最終的に女性のアイデンティティにどのような影響を及ぼしたのか、そしてジェンダーを通して見たとき、朝鮮の植民地近代はどのように異なる形で記述されるかを分析している。

以下、本書の内容を見ていこう。第一章は近代都市の散策者の概念から始まる。すなわち、19世紀の近代都市が生み出した観察する主体は、ヴァルター・ベンヤミンが提示した都市の散策者の概念（都市のスペクタクルを視覚的に体験する当時の視線の主体とされる存在）を通じて具体化された。ただし、散策者の視点は主に男性のものであったため、著者は散策者の概念には都市空間の別の主体であった女性の立場が徹底的に排除されたと指摘し、帝国日本に占領された朝鮮の京城に現れた「散策者」としての女性たちに焦点を当てる。本章で著者は1920～30年の京城で散策は都市人の趣味として注目を集め、当時「京城の銀座」と呼ばれた本町は人々が散歩を楽しむ空間となっていたと説明する。ここでの女性散策者たちは「観察者＝凝視する主体」であるとともに「消費する主体」（「行きつく先は百貨店」）である。

第二章では大衆的メディアに表れたモダンガールのイメージを論じている。1920年代の新聞、雑誌、小説などに登場するモダンガールは、1910年代までの、女性の権利や民族意識に目覚めた主体として形象化されていた「新女性」から派生した存在ではあるが、高等教育を受けた女性の増加とともに、社会啓蒙よりは消費に溺れ、自分のセクシャリティを自律的に行使する存在として登場したという。そして彼女たちは第一世代のエリートの新女性とは異なり、高等教育は受けたものの専門職に就くことができず、各種「～ガール」と呼ばれる新種の女性職業人の道を選ばざるを得なかったのである。また、特筆すべきはモダンガールが自分の声ではなく、男性知識層の目を通じて構築されたイメージとして描かれたことである。例えば、『朝鮮日報』に掲載された安夕影のコラム（p. 85）は、男性の視線から見た当時のモダンガールを「セミヌードに近い服装を着て街を歩くモダンガール、技生、ある女学生、カフェ女給」と並べて冷やかしの対象として表象化している。

第三章で著者は、近代都市に生きていた女性の実体、趣向、好みなどを論じている。すなわち、本書でのモダンガールという概念は、近代教育を受けたが、啓蒙主義的思想が欠如したままぜいたくな暮らしに溺れた不良少女、商品を所有しようとする欲望に圧倒される女性、エリートの専門職（医師、教師、記者など）に就けず都市サービス職業に吸収される様々な「ガール」たち、さらに、セクシャリティを商品化した職業に従事しながら現実と理想の間で葛藤する女性労働者を含めている。この女性たちには高級／大衆文化の境界線を行き来するという共通点があった。

第四章は女性労働者が働く場所として近代都市空間を紹介する。本章は経済的主体として自覚する新

女性が登場する1920～30年代の植民地朝鮮に注目し、同時期に職業婦人の概念も出てきたと語る。しかし著者は「職業婦人」が明確に定義されず、むしろ多角的に理解されたと主張している。例えば、職業婦人は広い意味ではエリートの専門職、各種の「ガール」や一般労働者を含む概念であるが、狭い意味では都市の各種の「ガール」を示し、モダンガールと一致する概念であったとする。興味深いのは当時の職業婦人は華麗な経済的主体として羨望の対象となったにもかかわらず、実質的には劣悪な労働条件や環境（職場で性的な暴力に追い詰められる危険など）に耐えるしかない存在だったことである。

また、本章で紹介される「職業婦人」には技生・カフェの女給・近代家庭の「食母」(家事使用人)や乳母・女工なども含んでいる。彼女たちのなかには、階級・ジェンダー意識を獲得して社会運動家として立ち現れるものもいたが、多くはプロレタリア階級にも包摂されきれない周辺化された存在として生きていた。しかし、彼女たちには消費への欲求、階級上昇の夢などさまざまな欲望があり、その欲望を実現するために労力を費やした都市空間の行為者の一人であったのは間違いないだろう。

第五章は仕事を求めて国境を超えた植民地朝鮮の女性労働者を取り上げている。当時朝鮮では土地を失った零細農民などは職を求めて農村を去った。しかし、朝鮮経済が脆弱であったため、国内都市産業に職を得られず、多くの人々が日本に移住し、労働者となった。特に、女性労働者の場合、日本の関西地方に進出した女工には濟州島出身が多かった(植民地になってから自給自足の経済が崩壊し、生計を立てることが難しくなったことが理由である)。女工の募集過程、志願動機、勤務環境に関わる詳しい説明も興味を引く。さらに、女工以外にも自分の身体を商品化し、日本で労働しながら生きていた朝鮮料理店の技生・カフェの女給の姿を詳述している点は注目に値する。

「おわりに」で著者は、当時「モダンガール」と名指された女性たちは、植民地都市京城の街に、「自身の実存の経路を残した歴史的な存在」であり、「朝鮮内部の階級的、民族的、ジェンダー的な緊張をはらんだ社会的な産物であった」と指摘する(p. 355)。そして新しい外見やスタイルという共通性のもとに、階層、教育水準、理念などの内部の差異が無化される「異種混交性」がその際立った特徴であったと強調する。すなわち、女子生徒がショップガールになり、ショップガール・女優・技生がカフェの女給になり、女工や食母が遊興空間に容易に吸収され得たという意味で植民地朝鮮のモダンガールには特殊性があるという。植民地朝鮮における「モダンガール」には、不安定な経済や都市の周辺部にいた女性たちの生活そのものが投影されているのである。

次に、本書の意義と課題について述べておきたい。従来の植民地朝鮮の女性研究がある意味でのエリートである新女性に焦点を合わせていたのに対し、本書は、同時代の都市空間にいた女性全てを研究の対象としたことに大きな意味がある。例えば、第一章で著者は都市空間に現れた女性散策者に焦点を合わせ、女性散策者の二つのタイプを提示している。一つ目は散策の行為を記述として残した新女性であり、二つ目が消費者として生きていた多数の匿名の女性である。著者は、フランスと朝鮮で活躍しながら自身の個性やアイデンティティを確立していた羅蕙錫(朝鮮の第一世代の新女性であり最初の西洋画家)、文章を通じて京城の女性散策者を浮かび上がらせた女性記者や小説家の李善熙、そして欲望の主体として消費しつつ、欲望の対象として自らが消費される大衆の事例を、順を追って紹介している。植民地朝鮮の京城で非主流的な存在であった女性、特に、その中でも周辺部にいたモダンガールに注目し、モダンガールは自分の声や意見ではなく、知識層の男性から表象され、冷やかされる存在であったことを明らかにしている。

また、多角的な視線からモダンガールを理解しようとする姿勢も特筆すべきだろう。すなわち、多様

な職業群に属して都市空間に存在した女性の生き方や考え方を、様々な文学資料や大衆媒体などを利用して浮かび上がらせ、できる限り具体的に朝鮮のモダンガールの有り様に光を当てている。

一方で、いくつか説明が不十分な部分もある。これは著者が本書のはじめで語っているように、個別の論文を結びつけて一冊の書物にする中で発生した問題であると思われる。例えば、新女性とモダンガールの間には境界があるのかないか、不明瞭である。どの部分で新女性とモダンガールが一致し、どの部分で異なるのかについての明確な説明がない。同様に職業婦人という概念が第四章に限られて議論されているが、職業婦人と新女性とモダンガールをどのように区別しているか、なぜ、第四章に職業婦人という概念を紹介したのかに関して説明がない。これは独立した論文が結びつけられたことに起因しているのか、あるいは、明確に言えないほど新女性・モダンガール・職業婦人の境界が曖昧であったからなのか。いずれにしても本書の冒頭で各概念の定義や各章の連携に関しての説明は読者の理解のために必要だったろう。

このような全体の構成をめぐる問題は本書の理論的フレームワークとなる散策者の概念にも同じように適用される。例えば、散策者の概念は主に第一章で定義されるが、第四章と第五章では特に言及も説明もされない。逆に、サバルタンについての概念の紹介と説明は第四章で表れ、著者が周辺部に生きていた女性たちの現実を語る時に適用されている。それゆえ、サバルタンという概念を用いるのならば、本書の概念枠組の一つとして初めに紹介する必要があったと思われる。

さらに、『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』というタイトルで用いられている植民地近代とは何か、著者の説明が不十分だといわざるを得ない。また、近代朝鮮の都市空間を歩いていた人々の生き方や考え方を理解するために、なぜ「植民地」コンテキストは重要なのか。著者は植民地時代の京城に存在していた経済的・構造的な不均等に関して少しだけ第一章で記述している。すなわち、植民地当時、京城には日本人の比率がかなり高く（1934年基準で13～28%）、支配者と被支配者の居住地は分離（朝鮮人は北村・内地人〈日本人〉は南村）されていた。そして、帝国日本と植民地朝鮮は経済的にも著しく不均等であった。例えば、日本人に産業資本が集中していたのに対し、朝鮮は原料の供給や商品の市場として存在したうえ、日本人と朝鮮人の労働者の間には大きな賃金格差があった。しかしながら、このような植民地朝鮮の不均等がどのようにジェンダー化されて女性たちに影響を与え、彼女らの近代的な経験を作り上げたのかに関しては深い議論が必要だろう。

最後に韓国語版と日本語版の両方を読む読者はすぐに気付くと思うが、それらにはいくつかの違いがある。第一に、韓国語版での編集段階の違いが日本語版では訂正されている（例：第三章と第四章の項目の番号）。第二に、原書にはなかった絵や写真が日本語版には追加された。したがって、全体的に日本語版の方が編集の完成度が高く、資料もさらに豊富な印象を与える。以上述べてきたように課題はあるものの、本書は今後の植民地朝鮮のモダンガール研究に重要な視座を与えたと言えるだろう。

（ゆん・じそ／カンザス大学政治学部準教授・日本学術振興会外国人特別研究員）

掲載決定日：2016（平成28年）12月2日